
クラスの根暗と人気者。

暁月 夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラスの根暗と人気者。

【NZコード】

N6200Z

【作者名】

暁月 夢

【あらすじ】

クラスで根暗でいじめの対象となりつつある少年とクラスで人気者だが、クラスメートを信用していない少年。

そんな一人がネットなどを通して仲良くなる…
実は凄く似たもの同士な二人のお話。

【田野】

ネットの世界はいい。

だって、誰も学校での自分を知る人はいないのだから。

俺、朝倉 翔アサクラ カケルは学校ではあまり話したりはしない。

根暗だと学校のやつは思っているだろうし、話しかけられてもなかなか会話が続かないってどころじゃない。

話しかけられても「え？ あ、わつわかつた」とか。

それだけで会話終了。

というか、話しかけてくるやつもノート回収だとか、先生が呼んでるだとか。

そんな話しだけなんだけど。

たまに興味をもったやつが話しかけてきたときでもそんな感じで口惑い、口ごもってしまった。

沈黙が流れ、気まずいって感じじゃない。

話すことを必死に考えても相手のことなどにも知らない。というか興味なかったので全く相手のことを知らない。なので話すことが見つからない。

もう自分でも少しでも話しかけてくれて嬉しいはずなのに……

「めん。いいよ。君はよく頑張った。もう話しかけないでくれ

とも思つてしまつ。

情けない。

その一言だ。

そして、その話しかけてくれたやつも他のやつが呼んでるとかでどこかに行ってしまったが。

中にはそんな自分をからかいつぱりに笑いながら話しかけてくる輩も当然いるわけだ。

すぐ腹立つけれど。…にしても。ああ、なんて情けない。情けなさすぎだぞ！自分！！！

と心中でしかも今日あつた全てのことを思い浮かべ自分のことを嘲笑いながらパソコンの画面に映つていて自分の作ったウサギのような耳をした青色の肩くらいある髪の少年キャラクターを動かす。ちなみにコーラー名は“シヨウ”自分の名前をただ読み方を変えただけという至つて単純かつシンプルな名前だ。

俺は、ネットゲームといつものiocれしかやつたことがない。最初、ネットゲームは興味はあつたが手を出せなかつた。

理由は、パソコン自体が苦手でしかなかつたのと今まで家にパソコンが一台もなかつたからだ。

パソコンの授業なんてあつたらもうその日は最悪な日だつた。

授業中。俺は当然クラスのやつに聞けるわけがないし先生に聞くなんてもつてのほかだつたため、全くもつて課題もなにも進まない。おかげさまでその授業後、居残りとなつて若干先生に怒られながらその課題をやつた。

この文章を打ち込みなさい。とか言われても頑張っているのに行打つのがやつとだつた。

もちろん、成績も軍をぬいてその教科だけがめちやくちや悪かつた。そんな俺のパソコンの下手糞さを心配した親がパソコンを買つてくれて。

パソコン教室にも連れていかれそうになつたが…なんだからんで、結局通わされることはなかつた。

我が家にパソコンがきたのがきっかけで俺は、なんとなくこの当時できたばっかのこのネットゲームをやり始め、そのおかげでパソコンを扱うのが得意になり、今じゃ授業とかでも困る」とはなくなつた。

むしろ成績もこの教科だけクラス1良くなつた。

きっとこのゲームのおかげだらうなあ…。

このゲームをやってなればずつと前のままだつただらう。

もう、このゲームを始めて1年くらい経つ。
このゲームができたときからやり始めているのだ。

上にある王冠のアイコンをクリックすると一位から五位までのランキングが表示された。

ショウは、3位という好成績だ。

今ではランディング1位にならうともしているし、いつも5位以内をキープしている。
凄いと自分でも思つ。

いつの間にかはまつていていつのまにか順位があがり、ランキング1位。

そのせいか、このゲーム内でネット友達もたくさんできた。
ゲーム内では知らない人もいないんじやないかといふくらい有名だ。

ショウは凄いなあ。

ショウも俺だが時々うらやましくも感じた。

ショウは社交的でゲーム内では有名人。
人気もあり仲間にして欲しいという人も耐えない。
仲のいい人とかしか仲間にしないけど。

皆から慕われ、社交的。友達も多い。
学校で友達がない俺とは大違いだ。

それにネットで仲良くなつた人も学校での俺は知らないし。

「はあーあ…」

今度は深いため息をつくと、家の下の階のほうから母さんの大きな声で少し怒つているような声がした。

『翔ー！パソコンばつかやつてないではやく下に降りてきなさいー!』

あ、そういうやあ、夕飯だとかいつてたな…。

色々考えていて忘れ切つていたことを思いだし、慌ててパソコンの電源をオフにした。

「わかつたよー！今からすぐ行くーーー！」

俺は、すぐさま返事を返すと電気を切り、ドアを閉めて階段を下った。

俺は階段を下りながら、仲のいい人は大丈夫なんだよな。とまだぐだぐだと考えていた。

次の日。

「『今から学校いってきまつす』…つと。」

俺は、ボーッとしながら携帯で文字を打ち込んだ。

つい最近、今話題のツイッターというものを始めた。
はつきりいつてこれもただ前々から興味があつたのと、ほかのネット上で仲の良かった人のほとんどがツイッターをやっていたからだ。

案外面白いもんだ。

一言、おはようと、挨拶とかを打てば結構すぐに返事がくる。

“ ピピッ … ”

…きたきた。

携帯がなつたので開いてみると、ツイッターのほうにセリフを打ち込

んだ言葉による返信だった。

「おはよー『氣を付けて』」
「…」

俺はすぐに『多少は氣を付けます！』と冗談を多少いれながら返事を返した。

携帯といつても最近発売したタッチパネル式の最新型スマートフォンだが。

どうやらパソコンの魅力にはまったくなんじゃなく、機械の魅力にはまってしまったらしく。

もうすぐ学校につくので俺は、マナーモードに切り替える。

俺の学校に行くとき、最近はこんな感じだ。

耳には最近好きになつた結構マイナーなバンドの曲が流れているヘッドホンをつけながら。

ふと前をみれば、二人の同じ学校の生徒が仲よさそうに話している。左のやつはすまないが全く名前はしらない。だけど同じクラスの一人は確実に知っていた。

クラスの中心人物の俺の憧れでもある、岸谷悠斗カミヤウジだ。

どうしたらあんな風にクラスの連中と喋ることができんだろう。といつも思つてゐるやつだ。

ああいうキャラをしてくるやつは陽キャラらしく。

そんなやつと正反対のやつ……まさに俺は、陰キャ「」とかこういって。

だけど……なんかクラスの連中とは全然違つぽがするんだよなあ……。

とかボーッと前の二人組みをみてこりこりの間にか、苦手で仕方ない学校についていた。

……あ。やべ、昨日やつた課題を俺、鞄に入れたっけ？

急に不安に駆られ、学校の校門間時かのところ立ち止まつ、俺は鞄に手を突っ込んだ。

……ない。

一気に血の気がサッと引いた。

俺は、少し焦りながら鞄の中をもつと全体的に探す。

やつぱりないし……！

ガックリと肩を落とす。

今更、取りに戻るには登校時間が過ぎるのをしうがない……。ととぼとぼと学校の校舎内に入る前に携帯を取りだした。

すると、携帯のホーム画面にはさつきの返事のそのまた返事がきた
とこう報告がきていた。

「おお…多分じゃなくて気を付けるよー」

そして良く見れば、ほかにも色々学校にこべ。ところが今から前
のツイートだけでひとつと15、6通くらいの返信がきていた。
そのなかには、全く知らない人からもきいてる。

周りを見ると人も少なく、さつきまで前にいた岸谷悠斗ともう一人
名前の知らないクラスメートはいない。

そして、ついでに携帯で時間を見るといつまにか時間が経つてお
り、もうすぐで学校が始める時間になっていた。

当たり前だろ？

いつもギリギリで学校を出しているのだから。

やばい…。

少し焦りながらも俺は『課題忘れた…』ヒッシュターでツイートし
た。

この15、6通の返すにはめんどくさいので後回しにすることに決
め、携帯をポケットの中に入れ、急いで校舎へと入っていった。

教室には、ほとんどの生徒が登校して仲の良い者同士で話をして

教室内。

いた。

その中には、いつも通り、まだ朝倉はいない。

この時間が嫌なんだろうな。

と俺は思った。

友達がいない… といふか若干いじめの対象となつたつある朝倉だ。そんな学校に本当は来たくもないだろ？

はつきりいつて俺もこの時間が嫌いだ。
こいつやって楽しくもない、嫌いなやつと話すのも、面倒くさいし嫌でしかたない。

そんな事を思いながら楽しそうに田の前で話すクラスメートで朝、一緒にきた西野達の話を聞きながらボーッと考える。

朝倉を見ていると昔の俺を見ているよ？と思つ。

そして、友達になりたい。そもそも思ひ。

だけど、話しかけようとするたびにことじへ、邪魔が入る。
そして、やつと話せると思い、話して行くと『あんなやつと話すのか』とこづけられた目で見られる。

そんな目が嫌で怖くてダメだった。

結局、俺もこの嫌いなクラスの連中と変わらないんだと思つ。

昨日、話して行ったやつがいた。

朝倉は少しおどおどとしてまともに話せてない。

相手のやつはこいつのまにか他のやつが呼んでるとかでどこかに行ってしまった。

そんなことはなかった。

アイツも他のクラスのやつと変わらなかつた。
後で笑いながらと話していた『アイツ、暗すぎー・マジ、腹いてえ！
!』と他のやつと俺の前で大笑いしていた。

そんな事を言われてるとも知らずに朝倉は、疲れたような…だけど嬉しかつたと『うような顔を一瞬だけしていた気がする。

ボーッとそんなことを考えていると

「おーい！“きつしー”？どうした」
と言われ、西野がドアップで俺の顔を覗き込んでいた。
他の話してたやつも不思議そうな顔をして俺を見ていた。

「いや…朝、担任がな…」

俺は、とつさに朝、たまたま朝みた担任ことを言つと、西野は「マジで？！」と他のやつと笑いながら話しを再び開始した。

“きつしー”とは俺のことだ。
なんかコイツが勝手に付けたあだ名。

俺は、岸谷悠斗
キシタニユウト

学校というものが嫌いで仕方ない。
クラスの連中というのも大嫌いだ。
それに自分自信も嫌いで仕方ない。
ただ唯一、嫌いじゃないやつは、朝倉 翔だ。

あにつけは、昔の俺にそっくりだと思つ。

「いつやってクラスのやつと話しているのは、自分が昔のようにクラスで孤立するのが嫌だったからだ。

そこで理想の自分が今の自分だ。

クラスの人気者。

明るくて面白いクラスの中心人物といつ自分を作り上げた。

だけど、クラスのやつとは上辺だけ。

信用してはなしし、クラスの中でもよく話す西野でも家とかは呼んだ事はない。

プライベートでは全くかかわりがない。

誘われるが全てばれないような理由を付けて断つている。

さすがに家でまで自分を作るのは疲れる。

ホント、めんどくせえよな…。

はつきりいって、俺はちやらちやらしたようなやつは苦手だ。
クラスの連中のようなやつは苦手の対象。嫌いでしかない。

そんな事を思つていると扉が開かれ、朝倉が登校してきた。
チラッと俺は朝倉のほうを盗み見る。

周りのやつは、朝倉が入つてきたことにより、しゃべと朝倉の話を始めた。

『 もちろん、隣通つた……。』

とか小声になつてこない小声で女子が話している。

……聞こえてるつーの……あ、聞こえるよつて話してんのか。

朝倉は、少し顔を歪ませる。

俺がアイシと話せば周りの田舎は変わるだらうか。
と思つた。

といつか俺は、朝倉は別に暗くないと思つただけどな……。

眼鏡と前髪をもつ少し変えたら顔はいいほつだと思つし。なんとなくだが。

そんな事を考えてみるとチャイムがなり、クラスの連中は一斉に席についた。

「おひー・じゅー……」

とかいつて鳴り終わつてから西野だけ遅く席に座つたが。

しばらくすると先生がきてホームルームを始めた。

俺の席は、一番後ろの窓際だ。

朝倉の席は、廊下側の一一番前から一番田。

あの席嫌だらうな。後ろの俺見たいな席がいいだらうに。

とこつも思つ。

俺の日課は、朝倉の観察。
アイツは、見てて面白い。

いつもクラスのやつにばれないように見る。

ばれたら、俺も朝倉もなにを言われるか分からぬ。

机の上にうつ伏せになり寝る体制に入りかけたとき
「来て早々寝るな！岸谷！」

と担任が少し睨みながら俺に注意した。

クラスメートはもちろん朝倉の視線は俺のほうに集まる。

俺は、そんな視線お構いなしに軽く「サー…セン…あ、先生、今日派手にこけてましたよね？大丈夫ですか？」と担任に謝り、少し笑いながら今日みた担任にやらかしたこと言つと担任の顔が一気に赤くなる。

プライドの高い担任は誰にも知られたくなかっただろ。

いつも俺に突っかかるからうざいんだよな…。

成績がいいが態度の悪い俺をあまりよく思つていないので、少しのことですぐ注意してくる。

それを言うと視線は先生の方に向きクラス内はざわめく。

そして西野が「大丈夫ですか…せんせー！」と笑いながら茶化す。

担任は、少し焦りながら「そつそんなわけないだろ…！」と必死に否定してたが。

西野が笑いながら茶化してクラスメートが笑いながら皆、朝倉意外

が茶化していた。

「先生、少し後ろやぶけてますよ。」

と止めと言わんよつに笑ながらこいつと担任は、後ろを勢いよくみた。

皆はクスクスと笑いながら隣のやつと喋つたりしている西野が俺の言葉を聞き、またそれをネタに茶化す。

俺は少しため息を吐き、また寝る体制に入らつとすると俺の事をみていた朝倉と目があつ。

朝倉は、少し慌てながら、視線を前に戻した。

そんな朝倉を少しの間様子を盗み見ながら、俺は眠りについた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6200z/>

クラスの根暗と人気者。

2011年12月20日20時47分発行